

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

悪魔の課外授業

小説 富求乱児

挿絵 C S Y

プロローグ	006
第一章 潜入！ 百乃木学園	028
第二章 指輪と絵画	055
第三章 生物室での実験	099
第四章 体育倉庫の拷問実習	120
第五章 校長室の性職者たち	153
第六章 悪魔の集会	205
エピローグ	244

登場人物紹介

Characters



いまくら みほ
今倉 美帆

新体操部に所属している、百乃木学園のアイドル的存在の美少女。明るく快活で、勝ち気な性格の持ち主。

いまくら ありさ
今倉 亜理紗

美帆の母親。理知的な雰囲気をもった美しい女性。特別美術調査局「SIBA」に所属している。

いまくら しゅうご
今倉 秀伍

美帆の父親。引き締まった身体の偉丈夫。

こんの しおり
近野 栞

美帆の親友にしてクラスメート。物静かで落ち着いた感じの少女。

「な、なんだよ、それ……」

「おれは地獄の戦士マルコシアスの無敵の力を授かったんだ。ナイフも効かないこの身体には、お前のおもちゃじゃかすり傷一つつけられんぞ」

金属のように黒く光る筋肉男めがけて、美帆のクラブが思い切り叩きつけられる。だが、クラブはあっさり折れて、勢いあまった小さな身体は鉄の壁のような胸に激突する。

「ぐははっ、だから言っただろうがっ！」

「くっ、このお！」

今度はリボンよりも頑丈なロープで頑強な両腕を拘束しようとするが、岩田の恐ろしく太い腕がそれをもともせず引きちぎり、少女の細腰を抱いて万力のような力で締めつける。

「うあああっ！ い、息が……でき、ない……」

あどけない娘の甲高い悲鳴が、コンクリートの壁に木霊する。しばらくすると、美帆は気絶してぐったりとなった。

「あれ……ボク、何して……うわっ、なんだよ、これっ！」

しばらくして目を覚ました美帆は、わが目を疑った。いつの間にか、まるで奴隷のように拘束されているのだ。手は身体の前で縄跳びで縛られていて、なぜかハードルに跨され

ている。ハードルの薄い金属板が、股間に食い込むので足を動かそうとしたが、足は重い鉄アレイに紐で縛りつけられていてうまく動かなかった。薄いレオタード越しに、競技用具が凶器と化して柔らかい秘部を圧迫してくるので、背の低い美帆はつま先立ちになるしかない。下着もつけずにレオタードを着ている自分が、緊縛された痴態を晒しているのだと思うと、頬が桜色に上気する。

(な、なんでこんな恥ずかしい格好に……)

その様子を岩ゴリラこと岩田吾郎が面白そうに見ている。気絶している間、硬い鉄板に陰核が押しつけられて、乳首が震えるほどに勃起しているのが見て取れたのだ。虜囚となった娘の感度のよさを知った体育教師は、これから始める拷問がどんな効果を見せるか楽しみで仕方がなかった。

「なんだよ、これっ！ は、早くほどけよおっ！」

「何言ってやがる。面白いのはこれからなんだぜ。お前には今まで散々コケにされてきたから、ここらでどっちが上の存在か教えてやらんとな。それに、お前には聞きたいことがある。お前、指輪についてどこまで知ってる？ 麻生先生とは何のつながりがあるんだ？」

ハードルが股間に食い込むので、手で身体を支えながらつま先で立っていると、岩田が目の前に大きなバケツを置く。中には透明な液体が一杯で、なぜか見たこともないほど大きな注射器のようなものが入っている。一体何をされるのか分からなかったが、母の秘密

は守らなければならないと思った。固く唇を結んだ女子生徒を見て、体育教師はむしろ嬉しそうにしている。

「そうこなくちゃな。お前がどこまで強情か調べてやるよ。特別体力測定だ」

後ろに回った岩田のごつい手が、小さな身体を押さえつけてくる。身動きがとれない美帆は恐怖を感じたが、レオタードの尻の部分をめくられて、はつとする。

「へ、変態っ！」

「うるせえな、黙ってろっ！」

悲鳴と怒号が飛び交う中、少女のかわいらしい菊門が無骨な男の目に晒される。野太い指がそこに触れるのを感じると、羞恥心で全身の肌が真っ赤になっていく。岩田の指には何かヌルヌルしたものがついていて、固く閉じた肉の花が、冷たい粘液で解きほぐされていく。

「さ、触んなあつ！ あ、ああ、ぐう……」

まだ腹の調子が悪い上に、白カエルの愛撫で昂ぶった熱が敏感な柔肉への愛撫でぶり返してくる。下劣な変態教師に喘ぎ声を聞かれまいとして、必死に声をこらえる。だが、じゅくじゅくと肛門を嬲られると下半身の力が抜けていき、漏らしそうな危機感と恥ずかしい快感が同時に押し寄せてくる。

「なんだ、お前？ ひよっとして、もう感じてきたのか？ おいおい、もしかして毎晩の

オナニーもケツの穴でやってんじゃないだろうなあ」

「ち、ちがつ、はあう……ボク、そん、ああ……なことお、してない……」

侮辱の言葉を、ショートカットのスポーツ少女はアナルをひくひくさせながらも必死に否定しようとするが、お尻の穴から駆け上ってくる本物の快感を否定できない自分がいることに、羞恥心が燃え上がってしまう。そんな教え子の気持ちに一切構わずに、教師の太い指がぬるぬると肉門をこじ開けて滑り込んでゆく。美帆が力いっぱい肛門を閉じているにもかかわらず、柔らかく解きほぐされた菊門はゆっくりと太い指を呑み込んでいく。尋常ではない逆流の感触に腰が砕けそうになる。

「くうう、こりゃケツの方はかなりの名器だな。その感じようじゃ、お前も大分好きもんだな、え？ まあ、これで準備はできたな。じゃ、早速、特別体力測定を始めるぞ」

「……じゅ、準備って？」

ハードルを跨らせられた窮屈な姿勢ではあはあ喘ぎながらも、腹を下さないよう必死に力を入れている美帆の目に、とんでもない光景が映る。裸になっっている体育教師の股間に屹立する異様なまでに巨大な肉の杭。身体の筋肉と同様に黒く光り、血管が浮き出ている。狭川のもはや宋平太のエロ本で見たものなどとは比べものにならないおぞましいまでの巨根だ。割れた腹筋にくっつきそうなほどに、雄々しく反り返っているではないか。いや、それよりも恐ろしい光景は、その男が手にしている極太の注射器だ。先ほど目にしたとき

は何のためにあるのか分からなかったが、肛門を愛撫された後ならなんとなく理解できる気がした。

「ま、待てよ……それ、どうするつもりだよ……」

いつもは生意気な態度なのに、今は怯えた猫のようになっていた生徒を見て、岩田はただニヤニヤと笑っている。そして、針のない極大の注射器に、バケツに入ったかすかに白っぽい液体を吸い込ませていく。それは保健室に常備されている石鹼水を薄めたものだが、囚われの子猫には得体の知れない薬品にしか見えない。

「心配すんな。お前のちっちゃいケツの穴に、このでかい注射器をぶっさしてやるだけだよ。お前のお腹の中をすつきりきれいにしてやるからな。遠慮しないで、おれの前でぶちまけてみるよ」

「や、やめろっ……そんなの、ボク、入れられたくないよっ！」

カタカタと震える小尻の真ん中できゅっとすぼまった野いちごが、ぬめる潤滑油で濡れ光り、そこにレオタードを押しつけた冷たい二百cc入りの浣腸器の先端が当たると、ハードルを挿む細い指に折れそうなほどに力が入る。浣腸などしたこともない肛門にずぶずぶと異物を差し込まれる異様な逆流の感触で、恐怖と嫌悪感が湧き上がってきた。

「お、お尻が……ボクのお腹に、あああつ！ な、なんか、変だよおっ！」

極大シリンドラーに満杯の石鹼水がじゅぶじゅぶと小さな腸内に注ぎ込まれる間、赤くな

った括約筋はぎゅうぎゅうと冷たいガラス管を締めつける。本来ならばこれほどの量を一度に入れるものではないのだが、美帆は腹を膨らませてそれを全て受け入れてしまう。直腸から広がっていく冷たい感触に、快活な娘の顔が歪む。

「ああ、うぐうう……お腹が、あぐう……」

勝気な少女が眉をひそめて悶絶する姿には、凄艶なまでの美しさがある。ぴっちりとしたレオタードに彩られた肢体をくねらせ、直腸からこみ上げる苦しいような気持ちいいような複雑な感覚に苦悶する表情が、男の欲情を煽り、肉棒を肥大化させていく。

「驚いたな、今倉。まさか全部飲み込んでしまうとは、ひよつとしてお前、浣腸の常習者か？」

自らの嗜虐行為に酔いしれた筋肉男が大げさに驚いてみせて、無垢な少女の被虐の悦びを煽る。

「ち、違う。こ、こんなこと……はあ、し、たこと、ないい、うああ……」

「そうか、そうか、先生安心したぞ。まさか生徒が変態だったなんてことになったら、責任問題だからな。じゃあ、お前に浣腸のこと教えてやるよ。今ぶち込んだのは、水で薄めた二パーセント石鹼水だ。アルカリ性の石鹼水が、直腸の粘膜を刺激して排便を促す。さらに石鹼の乳化作用と洗浄作用が、お前の汚いウンコを柔らかくしてくるから、あつという間に腹を下すってわけだ」



変態教師の講釈が続く間、美帆はその効果を身をもって味わっていた。顔は青ざめ、全身に冷たい汗が噴き出している。ただでさえ腹の具合が悪いのに、石鹼水が容赦なく粘膜に刺激を与えてくるのだ。ぐるぐるという腹の音を聞きながら、ハードルを握り締め、屈辱感を噛み締める。

「うくう……岩ゴリラあ、こんなことして、うう……ただじゃ、すまさないぞ……」

「くくく、なんだってえ？ もっと入れてほしいってか？」

「え？ や、やめろっ！ 違ううっ！」

ぐっと身体を押されて前のめりにされると、再び冷たい注射器の先がレオタードのお尻のところを押しのける。足首に鉄アレイを縛りつけられて、つま先立ちをさせられては、避けようとすることすらできない。なす術もなく柔らかくなった肉の花が押し広げられ、ガラス管が体内に入ってきた。お尻をくねくねと動かし、弾けそうな肛門をぎゅっと閉じるが、巨大注射器は無慈悲に石鹼水を流し込む。

「はあううう……」

「どんなにこらえたって、もう出すしかないんだよ、今倉。だがな、おれの質問に答えたら、足かせを解いて、トイレに行かせてやるよ。どうだ？」

踏ん張ったつま先とハードルを握る手に力が入る。石鹼水と汚物で膨れ上がった内臓の形や、気を抜くと破裂しそうな肛門のひくつく動きも克明に分かるほど神経を集中した。

しかし、函を食いしばつても、眉をハの字にしてもこらえきれそうにはない。屈辱を感じながら、美帆は哀願の目で体育教師を見る。

「ようし、ようやく観念したか。じゃあ聞くが、お前、指輪のことをどこまで知ってる？ 麻生先生から聞いたのか？ あいつは何者で、お前とどういう関係だ？」

一度に浴びせかけられた質問のどれもが、答えるとまずい結果を呼びそうだ。もし、これが昼間の屋上で聞かれたのだつたら、どうとでも嘘をつくかシラを切るかしていただろうが、今の極限まで追い込まれた状況では、そんな機転も利かない。だから、黙って視線を落とした。

「……答えないなら、それでもいいぞ。もうちょっと、遊んでやるからな。つま先立ちの体力測定でもしてみるか？」

言うのと、岩田は少女が跨るハードルのハンドルに手をかけた。このハードルは、足についたハンドルを回すことで高さを調節することができる。今はそれを回すことで、残忍な拷問をすることができるのだ。黒い手が、ゆっくりとハンドルを回し始める。

「うあ、や、やめろ……こんなの……あうう」

必死につま先で身体を支えていたが、背の低い少女には、ただでさえそのハードルは高すぎるのだ。もはや身体を支え続ける手足には限界が来ているというのに、肛門にも力を入れなければならぬ。だが、冷たい金属板は容赦なく股間めがけてせりあがってきて、

どんどん食い込んでくる。

「どうだ？ もう限界だろう。話す気になつたか？」

手を止めて聞いたが、美帆は黙って答えない。その様子にむしろ悦びながら、教師はハンドルを再び回し始める。遂に美帆のつま先が地面を離れる。股間に体重がかかり、お腹がぎゅうぎゅうと圧迫される。石鹼水の染み渡った腸内が、猛烈に痛む。今にも最も侮蔑する男の前で一生の恥を晒してしまいそうになり、勝気な少女も諦めのときを悟った。

「はあ、あうう……も、もうだめ、分かつた、言うよ、言うからっ！ 早く下ろせえっ！」

「話せよ。話したら、下ろしてやるよ」

どこまでも残酷な岩田に怒りを燃やしながらも、精神的に追い込まれた未熟な女生徒に選択の余地などない。亜理紗から聞かされたことや親子であることも全て話してしまう。

「……そうか、まさか親子だったとはな。どうりで、揃って美味そうな女なわけだ」

「そんなことどうでもいいから、早く下ろせよっ！ も、もう限界なんだっ！」

もはや、絶叫に近い生徒の声に、残酷な笑みが答える。

「前々から思ってたんだよ。お前、おれに對する言葉遣いになってないな。少しは先生に敬意つてもんを払えよっ！」

黒い筋肉男が、容赦なくハンドルを回す。美帆の足はすでに地面を離れ、縛りつけられた鉄アレイがその足を下に引っ張る。どんなに手で支えてもハンドルの金属板は股間に食

い込み、焼けそうになった直腸から痛みと圧迫感が襲ってくる。しかも、さらに屈辱的なのは、その中に敏感な肉粒や陰唇がもたらす快感が混じっていることだ。

「な、なんで？ 下ろしてくれるって、トイレ行かせるって約束だろおっ！ あ、ああ、やだ、ボク、もう……あ、はあううううっ！」

レオタードの娘が、髪を振って悶える。いつも部活で使っているロープや体育で使うハードルで拷問されているのに、感じてしまっている自分が変態のように思えてくる。レオタードは一層股間に食い込み、縦じまになってくつきりと浮かび上がっている幼唇の部分にじわじわと染みが広がっていく。岩田がそれに気づいて、あきれたようにため息をつく。

「おいおい、ちょっと待てよ。なんだ、これは？ 愛液じゃねえのか？ お前、拷問されて感じてるのかよ。その年でとんでもねえマゾ娘だな」

「ち、違う。こんなの、違う……早く、早く、下ろせよお……」

「違わねえよ。そんなに漏れそうなら、トイレまでもたねえだろ？ おれが栓をしてやるよ」

下卑た笑みを浮かべた教師が、後ろに回る。嫌な予感がした。そして、その手にさつき美帆が振り回したクラブが握られて……。

「いやあああっ！ や、やめろ！ そんなところに入れるなあっ！ あ、うああううっ！」
幼い教え子の絶叫を楽しみながら、残忍な体育教師は、ラバーコーティングされたクラ

ブのグリップ部分を柔らかな菊門に押し込んでいく。括約筋の締めつけが、クラブを通して伝わってくる。その奥にある液状の排泄物と石鹼水をかき回す感触まで、はつきりと分かる。

「ほらほら、お前に正しい道具の使い方を教えてやるよ。世界初の変態新体操の選手になれるぞ、グヒヒ」

いつも練習に使っているクラブで躪られる感覚に眩暈がしそうになる。新体操が好きだし、自分の誇りだ。だが、それを踏みにじられているというのに、括約筋をぐりぐりと抉られる淫らな快感を否定できないのだ。三角木馬に跨る奴隷のように、ハードルに跨り、尻の穴に棒を入れてられている少女は、思わず甘い嬌声を上げてしまうほどに無垢な精神まで犯されつつあった。

「ガキのくせにエロい喘ぎ声出しやがって。たまんねえな。じゃあ、そろそろ抜いてやるか」

「……え？　だ、だめだっ！　やめろ、抜くなっ！　抜いたら、ボク……」

快感に溺れかけていた美帆が焦る。クラブは栓の役割をしているのだ。今それを抜かれたら、もうこらえる力は残っていない。ゴムの棒に引きずられて、きれいなピンク色の肛門がめくれ上がっていく。

「へへへ、お前のきれいなピンク色のケツの穴、いやらしくめくれ上がってくぞ。お前に

相応しい、変態の尻穴だよ」

だが、美帆にはその嘲りは聞こえない。すでに限界に来ていた精神が、遂に洪水を起こしたのだ。目の前が真っ白になり、解放感だけが身を包んだ。

ブシャーアアアアアッ！

茶色い液体が、栓を抜かれた幼い肉蕾を全開にして噴出する。だが、岩田は動こうともしない。石鹸水に混ざった排泄物に、レオタードが汚されていくのをじっと見つめている。そして、すさまじい音と臭いが、狭い用具庫に満ちていき、解放感に浸る少女を現実に取り戻す。

「すげえ……いつも生意気な今倉が肛門裏返して漏らしてやがる。たまんねえ……」

「やだあつ！ 見るなつてえつ！ ああ、音、音も聞くなよおつ！」

ハードルの上でうつぶせになって力尽きた少女の尻穴が、最後の空気を吐き出して、ポツカリと口を開いている。黒い筋肉男は、その手に持ったグリセリン溶液の瓶を傾ける。トロリとした粘液が、野太いペニスを濡らしていく。そして、残った液体で、茶色く汚れた純白の尻を洗い流す。ねっとりとした透明の液が、開ききった肛門から直腸へと流れ込んでいく。

「つ、冷たいっ！ な、なんだよ……た、頼むから、もうやめて……」

未成熟の色気に魅入られた男には、もう何も聞こえない。美帆の懇願でさえ、その耳に

は届かない。鉄のように硬く黒い肉棒が、ぬめぬめと尻を這う。セックスの経験のない美帆にとつて、想像もできない異常な行為が始まろうとしている。熱く、硬い巨塊が、突き込まれてくる。

「ひっ！ あ、ああ……う、ぐああああああっ！」

排泄の余韻で広げられた菊門と直腸を、剛直がさらに押し開いていく。初体験すらない純潔の身体に、あろうことか排泄器官から侵入していく黒い凶器。その大きさ、火傷しそうな熱さ、反り返って節くれだっている形が、身体の内側から伝わってくる。獣のような勢いで、清められたピンクの洞窟を再び侵食してくる。敏感になった括約筋が、内側に巻き込まれていき、龟头を、雁首を、肉茎を締めつけ、肛門被虐の肉悦に目覚めた青い肢体が、限界まで弓なりになる。

「あううううっ！ く、苦し……はあ、あ、きやうううっ！」

「す、すげえ！ 今倉の肛門が、おれのチンポ締めつけてやがる。くそ、なんてスケベなガキなんだ！」

（ああ、ボクも葉みたいに犯されてるんだ。お尻にオチンチン入れられて……）

自らの汚臭にむせびながら、美帆は自分のメスとしての性を思い知らされていた。粘液の絡みついた男根で小さな排泄器官を犯される異常さに快感を感じ、それを恥じる自分に酔いしれていく。

「ケツの穴にチンポ入れられて感じてる変態が、いつも偉そうにしてやがったとはなっ！」
縛られて逃げることもできず、美帆は犯され続けるしかない。バージンの陰唇から愛液を垂らし、倒錯的な快楽に呑み込まれていく。朱色に染まった肌に、汗でレオタードが張りついている。勃起した乳首がハードルに擦れて感じてしまう。

「おお、ど、どうだ、今倉あ。先生のチンポはどうだっ！」

「いやああっ！ あ、熱い、ぬ、抜いてよおっ！ うああ、だ……ああううっ！」

狭すぎる肛門は岩田の剛直を呑み込みきれないが、幼肛の収縮はそれでも十分に男を悦ばせている。何より幼い女生徒との肛交というタブー感が、最高のエッセンスなのだ。

「くっ、も、もたねえ。いくぞ、今倉あ！ ごうおおっ！」

「ひあ、な、何？ あ、な、なんか熱いのが……うああああ！ だ、だめえええええっ！」
洗い流された直腸に、大量の白濁液が注ぎ込まれた。腸粘膜に勢いよく叩きつけられるその液体が何か、美帆もすぐに分かった。

（精液、男の人の……ああ、こんな男の精液が、私の中に……）

お尻に出されても妊娠しないのは分かっている。しかし、想像していた初めてのセックスは、もつと大人になつてから、ステキな男性とムードのあるベッドルームでのことだった。それなのに、肛門を無理矢理犯されるといふ行為が、初体験になつてしまったのだ。嫌悪していた男の腐液を注ぎ込まれながらも、肛門が甘く痺れ、直腸が熱く蕩けている。

「は、あうう……ひどいよ、ボク、もう……」

「あん？ 嫁に行けねえってか？ 何言ってやがる。嫁に行ったときに男を悦ばせられる、立派なメス犬としての教育をしてやってんじゃねえか」

理不尽なことを言いながら、岩田は肉の凶器をずるずると抜き出す。大きすぎるペニスを咥えていた肛門は淫らに広がり、美しいピンク色の腸壁が見えている。そこから大量の白濁液が、ぶくぶくと泡を立てながら流れ出してくる。

「へへ、ケツの穴が開きっぱなしだぜ、今倉」

汚された乙女は、颯々するような言葉に黙って耐えている。感じていたのは事実だ。それが、どうしようもない女の性なのだと思ってしまう。

「じゃあ今度は、口の方の勉強を始めるか」

「な、何を……ああ、もう下ろしてくれよお……」

眼前に突き出された肉棒から顔を背けて、力なく懇願する。肛姦の悦びを知った身体は、まだ熱を帯びていて、ハードルが股間に食い込むのも快感になってしまう。

「分かってねえな。お前には、そんなこと言う権利はないんだよ。おら、お前の穴に入れて汚れちまったおれの極マラをきれいに掃除しな」

「な、ど、どうやって？ 手、ほどいてよ……」

岩ゴリラは、指の代わりにペニスを振りながら、ちっちっちと舌打ちする。

「ガキは、フェラも知らねえのか？ フェラチオって言ってな、舌で舐めて、唇で啜るんだよ。アイスクャンディーの要領でやってみな」

目の前に、射精したばかりにもかかわらず、はちきれんばかりに膨張したペニスがり立っている。絡みついたツタのように見える浮き上がった血管がびくびくと蠢き、盛り上がった龟头はとてつもなく大きい。あれが自分の肛門を貫いていたと思うと、あらためてぞっとした。そして、この残忍な体育教師は、その汚らわしいモノを舐めると言うのだ。「やだ、そ、そんなこと、できるわけ……うふううっ！」

いきなりごつい手が小さな顎を驚つかみにして、剛直を口に押し込んだ。

「くう、小せえ口だな。おあ、柔らかえ舌が当たって……うほお、気持ちいいぞ」

美しいつり目を歪ませて、涙目になっている生徒のことなどお構いなしに、岩田が腰を突き入れてくる。だが、あどけなさの残る唇は、一杯に開いても龟头を啜るのが精一杯だ。硬い肉塊が口腔を挟り、精液や腸液の混じった臭いが喉から鼻に上ってくる。

「ん、ぶぐうっ……んむ、んん……んうううううっ！ うぐう、ぶはあっ！」

一通り柔らかな口腔の感触を楽しむと、筋肉男はようやく巨大な龟头を引き抜いた。臭いと息苦しさで喘ぐ、短髪の少女の顎をペニスが持ち上げる。

「休んでる暇はないぞ、今倉。お前の下手なフェラチオじゃなかなかイケねえからな。さあ、今度は舌でこの抉れた部分をペロペロ舐めな」

「や、やだあつ！ こ、こんなのやだよお！ やだあ！ ば、パパの入れないでえつ！」
遅しい腕が小さな肩をがっしりと掴む。両手も後ろ手に縛られており、動くことすらできなくなつた美帆には、抗う術は残されていない。小さな身体の上に、遥かに大きな男がのしかかり、男を知らぬ秘口に禁忌の淫棒が禍々しく埋没していく。

「ぐうう……は、あくう！ い、痛い……こ、こんな、のお……」

どろどろになつた小さな肉壺が、ぎりぎりとは締まって侵入者を押し出そうとする。だが、凶悪な肉塊は、容赦なく実の娘の中に入り込んでいく。岩田に肛門を犯されたときは、比べものにならないほどの恐怖と嫌悪感。肉を引き裂かれ、身体を突き抜かれるような痛みが、小さな肢体を震わせる。だが、秀伍は無慈悲に腰をせり出して、血のつながつた娘の防壁を突き破つた。

「や……う、くつ……ああーっ！ く、うううああんっ！」

被虐の悲鳴が、校長室に轟く。ぶつりと音がしたかと思うと、じんとする鈍痛とともに膨れ上がるような充足感が流れ込んでくる。清純な膣内に汚れた肉棒が押し入ってきて、柔らかな肉壁がぐりぐりと抉られていく。純潔を失つた少女は、涎を垂らしながら悶絶した。

「うう、かはあ……あ、熱い……こ、壊れちゃうよお……」

「これで美帆も立派な大人の女だな。しかし、こいつは……」

驚いたことに、小柄な少女の秘部は、意外なほどにすんなりと肉棒を吞み込んでいく。実は、挿入の直前に萩倉の力でふたまわりほどペニスを小さくはしたのだが、それでも大きすぎるほどの巨根である。しかし、限界を超えるであろうそれを、愛娘の秘裂は待ちわびていたかのように包み込んで、ぎゅうぎゅうと締めつけてくるのだ。岩田による執拗な肛姦や少年たちの愛撫で蕩けきった蜜壺は、未熟ながらも肉華として咲き始めていたようだ。幼唇は初めての男を固く挟み込み、生娘の苦痛をいち早く快感に変換する。すでに、破瓜の血には悦びの愛液が混じって、男根が入るごとに、泡だったピンク色の淫汁を噴き出している。

「あつ……うう、あつ、ああ！」

柔らかい膈壁を硬い怒張で擦られる快感が、確実に少女を女に変えていく。尖り立った乳首を摘まれ、捻り上げられると、小さな肢体が男の下で跳ね上がる。

「美帆、気持ちいいか？ パパのチンポで感じてるのか？」

「ち、違つ……くああつ！ あ、あ、あん、ああううつ！」

否定の言葉など意味をなさない。濡れた肉の絡み合いが小さな身体を淫蕩の悦びに震わせ、湿った音は校長室にいる誰の耳にも聞こえている。秀伍は亜理紗の目を見つめながら、娘の身体を思うままに蹂躪する。

「だ、だめ、パパっ！ そ、そんなにしないで！ うあ、あ、あはああつ！」

実の父親に犯されるという歪んだ行為が、タブーを犯す危うい快樂に陥れていく。青い果実のような乳房が揉みほぐされ、小さな乳輪も盛り上がっている。肉欲の中に、倫理観が入り込む余地などなかった。男を知ったばかりの美帆の身体は、意思に反して溺れるまに父親と交わる悦びを貪っていく。小さな陰唇と膣壁が、懸命に侵入者を締めつけて、より深い結合を求めているのだ。

「おお、美帆。お前こそ、おれが求めるものだ。おれのためにお前は生まれただ！」

「ああ、うあ、あん！　だ、だめ……パパとこんなこと……ああ、やめてえっ！」

亜理紗は、呆然として娘が夫と肉欲を分かち合うのを見ている。やってはいけないことをやっている。そして、それを側で見ているという背徳感が、彼女をも陶醉させていく。見つめている秀伍の目に、それを見透かされているのにも気づいている。

「行くぞ、美帆……」

わざと妻の目を見ながら言うと、秀伍は腰をさらに深く押し入れた。小さな身体ではその巨根を呑み込みきることなどできるはずもなく、すぐに子宮口にずんずんと怒張が突き当たる。肉奥までびっしりと満たされる強烈な責めに、美帆の声が高まっていく。

「うああああっ！　お、奥まで、ひ、ひああああっ！　だめ、だめ、な、なんか来る！　ボク、おかしくなるう！」

リボンでくるまれた細い足がピンと突っ張り、紅潮した小さな身体がぶるぶると震える。

女として、そして背徳の娘としての最高の快樂を父に与えられ、美帆は真つ白な高みへと昇っていった。

「うごおっ！」

雄たけびとともに、強大な怒張から白濁が噴出し、最奥まで実の父のオスの種をどぶどぶと流し込まれる。だが、それすらも今の美帆にとっては被虐の悦びとなり、熱い雄汁を受けながら、愉悅に腰を震わせている。宙空を見つめる目は白濁していて、脳裏に浮かぶ悅樂の園しか見えていない。

「秀伍さん、あなたは自分の娘によくこんなことができますわね」

地べたに這いつくばる格好で押さえられながら、亜理紗が夫を睨みつける。だが、秀伍はいまだ肉棒を脈打たせ、大量の精液が父親の淫茎と娘の秘裂の隙間から溢れ出してくる。そして、ようやく白濁にまみれたペニスを抜き取ると、妻の言葉を無視して岩田の方を振り向いた。

「岩田先生、あなたの熱心な教育で、美帆は最初から存分に乱れてくれましたよ。女は、やはり恥辱の中でこそ淫猥な資質を花開かせる」

「へへ、どうも、今倉さん。じゃあ、約束どおり、いいんですね？」

「ええ、どうぞ」

にこやかに頷いた秀伍は、娘を串刺しにしたままその小さな身体を持ち上げ歩き出す。

「ひあうっ！」

ぐったりしていた美帆が悲鳴を上げる。身体を持ち上げられ、自分の体重によって男根をより深く啜え込まされたのだ。ぱっくりと開かれた股間から、ピンク色の淫液が糸を引くように垂れ落ちてくる。秀伍はそのまま歩き出し、部屋の中央に置かれたソファに腰掛けた。

「ああ、やあつ！ う、動かないで、パパあ！ あううん！」

「さあ、美帆、まだまだ再会の宴はこれからだぞ。そら、自分で腰を動かせ」

下から突き上げられるたびに、少女の小さな肢体が跳ね上がる。手を縛られた美帆は父親の胸によりかかったが、乳暈ごと乳首が硬い胸に擦れ、思わず身体を離れた。すると秀伍は大きな手で未熟な乳房をやりわりと撫で回し始める。

「いやあつ！ ふ、深いよお！ お、奥まできちゃううっ！」

対面座位の姿勢でソファに座って乱れる夫と娘を呆然と見ていた亜理紗の肩に逞しい手が置かれる。振り向くと、指輪の力で隆々とした筋肉を黒い鉄のようにした岩田が立っている。

「さあ、麻生先生。今度はおれと楽しもうぜ。おれはガキも好きだが、あんたみてえな人妻も好物だね」

若い人妻は、怪物のような巨漢の好色な笑みに慄いた。またしても愛してもいない男に

犯されるといふ嫌悪感だけではない。その股間には、秀伍ほどではなくとも、やはり巨大な淫根がそびえているのだ。

「あ、あら、あなたのような子供っぽい男が、大人の女を満足させられるんですの？ それが無理だからロリコンになったのかと思いましたが」

亜理紗は精一杯の強がりて皮肉を返す。だが予想外なことに、その言葉は単純な岩田を怒らせるには、十分すぎるほどの侮辱だった。

「おもしれえ！ いい度胸してるな、あんた。やつぱりただで犯すのはやめたぜ。あんたも娘と同じように屈辱的な格好をしてもらわねえとな」

体育教師はのしのしと歩いて、脱ぎ捨てたスパッツの中に隠しておいたものを取り出してくる。

「こ、これは……」

亜理紗は絶句した。なぜならそれは、娘の身体を淫猥に緊縛しているのと色違いの黒いリボンだったのだ。それをどうするかは考えなくても分かる。

「ママにそんなことするなあつ！ 岩ゴリラ、あ、ううん……」

父親に跨って腰を振り乱していた美帆が、体育教師の行動に気づいて絶叫したが、すぐにその口を秀伍の唇が覆ってしまう。

(ボク、パパとキスしてる。それも、大人の……)

ぎこちなく舌を絡ませる少女の意識が、父親とのディープキスという淫靡な行為に惚けていく。

巨漢の教師は背の高い美人調査官を無理矢理立たせると、黒いリボンで赤いドレスの上からきつく縛り上げていく。乳房を上下から絞るように巻きつけると、淫らに変形した肉果がさらにその存在感を主張するように突き出てくる。ただでさえ色気を匂わせる真つ赤なチャイナドレスが黒紐で縛り上げられて、劣情を煽り立てる。

「これでメス奴隷らしい格好になつたな」

「見ないで、美帆……こ、こんな恥ずかしい格好……」

背の高い亜理紗はその容姿の美しさもあって、モデルか女優といつても通じるほどだが、それほどの美女が緊縛されている。男たちは、腰をくねらせてもがくたびに女の胸が扇情的に揺れたり、スリットから淫らに愛液が糸を引いている股間が覗くたびに目を細めている。突然、その長い脚がくずおれて、四つん這いになる。股間がドレスに擦れて、耐えがたい快楽が全身を駆け抜けたのだ。肥大化してびくびくと震える乳首が、絨毯に擦れる。

「ふぐうう……あ、ああ……」

「おいおい、あんたこそ一体何してたんだ？　すげえな、こりゃ。娘以上の変態だな」

岩田がドレスの裾をめくって奇声を上げる。なにしろ、つい先ほどまで毅然としていた女の股間では、クリトリスがペニスのように長く伸び、股間を通して肛門に刺さっている

のだ。

「ああ、ち、違いますわ……こ、これは、教頭先生が……」

「おや、何をおっしゃるんです、麻生先生？ あなたが私の力でクリトリスを伸ばして、肛門に入れてほしいと言ったんじゃないですか。ねえ、今倉さん？」

教頭がねずみのような高い声で、わざと秀伍に言う。腰を突き上げられて悶えている美帆が、その虚言に惑わされてしまうのを計算して。娘の目を見ながら、父親は頷いた。

（嘘……ママが、そんなことするはずないよ……）

「驚きだな。娘の変態ぶりは、あなたに似たんだな」

「や、やめて……美帆がいるのに、そんなこと……」

貶められていく母を見て、美帆の中で疑念が渦巻き始める。そのとき、ソファに座っていた秀伍が立ち上がる。

「ああつ！ 待って、パパ！ う、動いたら深くなっちゃうのお！ お、奥まで、ああ、あああんつ！」

逞しい腕で娘の小さな身体を上下させながら歩くと、妻の前であぐらをかいた。そして、首に回されていた娘の手をほどくと、ペニスを軸にして一回転させる。ぐりぐりと怒張が柔らかな膣壁を抉り、美帆の目の前がスパークする。

「あ、ああああああつ！」

一瞬にして絶頂に達し、再び気がつくと、その眼前には四つん這いになった母の股間があった。美帆も間近にその淫猥な光景を目にすると、愕然としてしまう。赤黒いピラピラとした陰唇がひくつき、ペニスのような陰核に愛液という涎を垂らして吸いついているように見える。そして、長いクリトリスの先を、めくれ上がった肛門が深く啜え込んで、股間の性感帯が一体と化している。陰唇も発達していないきれいな割れ目しか持っていない美帆には、同じ女の股間とは思えなかった。亜理紗は、娘と夫におぞましい姿にされた股間を間近に見られて恥辱に打ち震えている。

「見ないで、美帆……秀伍さん、お願いですわ。美帆には、こんな姿を見させないで……」
「何を言ってるんだ？ 自分の娘に本当の姿を見せてやるんだ。さあ、見なさい、美帆。これが、ママの本当の姿だ。異常発達したクリトリスを肛門に出し入れして、オナニーをするのが、お前のママなんだ」

秀伍は言いながら、指輪をした手で亜理紗の尻を撫でた。もう片方の手は、娘の小さな胸をまさぐっている。美帆は、その手と腰を突き上げられる快感に眉を寄せながらも、ふしだらな母の姿に目を奪われてしまう。父の剛直を啜え込んだ秘裂から、じゅくりと蜜が湧き出してくる。

「ママはお前が来るまでこうやって一人悦んでいたんだ。いや、もしかしたら学校に来る前から、ずっと入れてたんじゃないか？」

その淫らな虚言は、うぶな少女に少しづつ嘘の現実を信じ込ませていく。

「おい、おれは麻生先生のオナニー見てねえぞ。おれの前でもやってくれよ。自分でクリトリス伸ばして、肛門から出し入れしてくれよ」

体育教師の下卑た注文に、背筋が凍りついたように固まる。そんなことをすれば最愛の娘にどう思われるか、考えるまでもない。

「い、嫌ですわ……そ、そんなこと……ああ、どうして？」

言葉とは裏腹に、四つん這いになっていた亜理紗の手が股間へと伸びていく。長い指先がなぞるようにして膨張した淫核を擦り上げる。ぴっちり縛りつけられた乳房をしなやかな手が揉みしだき、乳頭を指で摘み上げるとじんじんと快感が全身を包み込んでいく。

「ああ、嫌ですわ……みんなの前で、こんな……はあああんっ！」

意思に反して動いている優美な手が、ウインナー状のクリトリスを掴んで、ゆっくりと動かし始める。秘裂が擦られ、直腸に自らの陰核がめりめりが入っていく。止めようと思っても、秀伍の手が尻を撫でるたびに手が動く。

「やあ、あ、やめて……あふっ！ んああ、しゅ、秀伍さん、でしょ？ ああ、あんう、こんなこと……させて、くううっ……」

普通なら小さな豆粒のような肉芽を撫でられるだけでも感じすぎてしまうのに、今は巨体化したそれを掴んでいるのだ。大きすぎる快楽の波に翻弄され、喋ることもままならな

い。湧き出す愛蜜が菊門に塗り込まれ、尻穴がぬちゃぬちゃと卑猥な音を立てている。高く育てられた亜理紗にとって、肛姦など考えもできない行為だったのに、今は多数の視線を浴びながら自ら肛虐に興じている。気が狂いそうなほどの快楽と恥辱が、美人調査官の全身を犯していく。

「ああ、うああん……お、お願いですわ。やめさせてください、秀伍さん……ああ、あはあん！」

口ではそう言いながらも、涎を垂らして陰芽を肛門に出し入れする母の姿に、娘は言葉を失っていた。突き上げられる悦びに意識が飛びそうになりながらも、貪るようにその姿を凝視している。床に額を擦りつけて自慰行為に興じている亜理紗にも、腿の間からレオタードを着た娘の小さな身体が、愛する夫に犯されている姿が見えている。

「はあ、くああ……み、美帆……私のように……お、溺れないで、くふううんっ！」

「ああ、でも……パパのおちんちん……おつきくて、うああっ……ボク、変になりそうだよおっ！」

シヨートカットの娘は、背面騎上位で髪を振り乱して悶えている。その左右に、太い怒張と長い陰茎を携えた二人の教師が立った。

「親子水入らずのところ申し訳ないが、我々も加えてもらいますよ」

「うまいな、教頭。啞えさせるから、加えてもらうってか！」

品のない冗談を言いながら、体育教師は一物を生徒の小さな唇に押しつける。拒絶しようとした娘の顎を秀伍の手が掴み、無理矢理啣えさせてしまう。

「へへ、さつき教えた要領でやってくれよ、今倉」

「ほう、フェラチオの仕方教えてもらったのか？ 高い学費を払って百乃木に入ったか
いがあったな、美帆？」

少女は、父親の目の前で男の性器を啣えているのを頬を染めて恥じている。だが、男に目覚めた身体が、際限なく精を求めているかのように唾液が湧き出し、唇の間からじゅぶじゅぶといやらしい音が響く。次第に甘美な倒錯感に理性が麻痺していき、美帆は自ら舌を動かし始めた。

「私の方も、やってもらおうか」

萩倉のペニス、蛇のように首を持ち上げて、剛直を吐き出したばかりの唇に自ら滑り込んでいく。つり目の美少女は、口腔を這いずり回る細長いペニスの動きに驚愕したが、すぐに粘膜を擦られる悦びの方が大きくなっていく。

「んむう……むはあ、あ、あんだたちなんか……絶対、やつつけるからな……うぶう」

岩田は美帆の言葉に耳を貸すこともせず、口腔を犯すように腰を突き入れてくる。教頭のペニスは下に移動し、首元からレオタードの中に入り込むと、膨らみ始めたばかりといった感じの胸を這い、サクランボのような乳首にまわりついていく。

「んあああ……あ、ち、乳首は……や、やめろよお……」

二人の教師と実父のペニスを上下に啜えながらあどけない嬌声を漏らす娘。それを見ながら悶える母は、解消しきれない欲求に気が狂いそうになっていく。

「秀伍さん……わ、私も……ほ、欲しいですわ……」

「ほう、何が欲しいんだ？」

いじわるな質問に、年若い妻の顔が赤らんだ。

「は、恥ずかしいですわ……あの、秀伍さんの……おちんぼが……」

男たちの顔がにやつく。気品溢れる育ちのいい美女が、人前でおねだりをしているのだ。娘にも淫蕩な母と思われるに違いない。

「そうだな……こうしよう。美帆が私より先にイッたら、君の中に入れてやるよ。だから、頑張つて美帆がイクようにするんだな」

「そんな……も、もし秀伍さんが出してしまったら、どうなるんですの？」

「そのときは、岩田先生がやりたがってるから、彼に代わってもらうことにしよう」

亜理紗は絶句した。美帆がイキやすいように協力したら、自分のあさましさをまざまざと露呈することになる。しかも、夫に犯されている娘に奉仕するなどという行為が許されるだろうか。しかし、そうしなければ、愛してもいない、下劣な男に抱かれなければならぬのだ。悪魔のような選択を迫られた女は、身体の向きを変えると震える唇で娘の小さ

な陰核に吸いついていく。

「きゃあううううううっ！ はあ、ママっ、だめ、そこ、そこ、ダメだよおっ！ ああ、うううあああつ！」

剥き上げられた淫果にざらつく母の舌が這うと、教師の陰茎に舌を這わせていた娘が、絶叫に近い声を上げた。だが、亜理紗は構うことなく夫の巨幹が挟り込んでいる秘裂を指でなぞり、かわいらしい肉芽をちゅうちゅうと吸い上げる。

「ごめんなさいね、美帆……でも、ママは秀伍さんじゃないとダメなの。美帆も、ママが他の男の人に犯されると、見たくありませんわよね？」

「そ、そんな……はうう、あ、あはああつ！ す、すごすぎるよお！ パパのおちんちんとママの舌で、ボクおかしくなっちゃうよおっ！」

秀伍が、より激しい抽送ができるよう後背位の姿勢に切り替えると、亜理紗もそれに合わせて娘の下に仰向けに寝て、指で陰核や乳首を転がしてやる。激しいピストンを始めた肉塊が出てくるたびに娘の愛液が飛び散って、母の眼鏡や長い髪を汚していく。

「あ、ああ、ボク、もう……あうう、く、くはあつ……んむうう！」

よがり狂う少女の口に、むせるような臭いを放つ岩田の肉棒が押し込まれてくる。快楽に飛び散りそうな意識をつなぎとめようと、すがるようにそれを両手で掴み、思い切り吸い上げる。

「んん……おむう……ひあああつ！」

なりふり構わず娘を追い詰めようと、亜理紗は容赦なく陰核を摘み上げる。もう片方の手は小さな肛門をまさぐり、細い指先をつぷりと差し込んでいく。

「うああつ！ お、お尻は、ダメだよお……ん、くああつ！」

だが、娘を追い込もうと必死な母に、教頭が奇襲をかける。うねるペニスが、熟れた女の乳房に絡みついていき、ぷくりと勃起した乳首に巻きついて締め上げたのだ。

「あ、ああつ……きよ、教頭先生、やめてください！ い、今、そんなことされたら……あふううつ！ んあ、ああ……うあああつ！」

教頭の力が再び働いて、勝手にクリトリスが動き始める。愛液を飛び散らせながら、肛門を陰核が貫く。もはや美帆への愛撫どころではなくなった亜理紗には、娘の愛液を浴びながら悶えることしかできない。

「ま、ママ、んああ……ダメだよ……早く、あん、ボクを、イカせないと、ひあつ……パパ、出しちゃうよお」

「ああ、お、お願いですわ、美帆……は、早くイッて……そうしないと、わ、私……ああ、あん、あおおん、ダメ、いく、いく、いきますわあああああつ！」

絶叫とともに美人妻の腰がぐんぐんと痙攣を起こし、噴き上がる愛液が、肉棒に吸いつく娘の顔までも飛び散っていく。



「くう……いくぞ、美帆お！」

「あ、ああ、だめ、なんか熱いつ！ あ、あ、やあああつ！」

直後、絶頂の波に呆ける亜理紗の視界が真っ白に染まる。それは、眼鏡に垂れ落ちてきた精液だった。ぐったりとした娘の身体が、柔らかな母の上に重なって崩れ落ちる。その小さな秘唇から大量の白濁液が流れ出している。滝のように流れ落ちる淫液が、朱に染まる豊乳の上に広がっていく。

「約束どおり私が先にイッたから、君は岩田先生に相手をしてもらってくれ」

「ママ……ごめんよ。ボク、もうちよつとでイキそうだったのに……」

美帆は、母の上から降りながら申し訳なさそうに言ったが、返事をする前に黒い巨漢がのしかかってきて、亜理紗の視界が真っ暗になった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>